

審査の結果の要旨

氏名 グーセワ アンナ

本研究は、モスクワの都市郊外における別荘住宅地、ダーチャの現状と歴史的経緯をフィールドワーク、既存の研究、現在と過去における統計・文献資料による調査結果等を分析することによって、ユーラシア大陸の北西部に位置するロシアの首都モスクワの19～20世紀にかけての都市の郊外化の実態を明らかにしたものである。

本研究は、序章の他、8章で構成され、最後に別途結論が置かれている。第1章は既存の研究、統計資料を駆使して、ここ20年間、社会主義から市場主義に移行するなかで人口が20パーセント増加した都市の姿の概要を描き出す。第2章では、別荘ダーチャの定義（別荘型ダーチャと菜園付き別荘型ダーチャとの二つのタイプ）と19世紀から始まるモスクワの郊外化、そこで建設されるダーチャの歴史的経緯、類型化を都市の変容を明らかにする。概ね5つの時代に分けることができる。

第1期のダーチャは、1830年代から1917年までの時代で、馬車で移動可能な都心から10km程度に貴族のために造られた。第2期は、1860年代から1917年までに造られたミドルクラスのダーチャの時代であって、都心から20キロ程度に建設された。第3期は1890年から1920年代までに一般の人々のためにダーチャが建設された時代である。汽車などの公共交通の発達で、40km圏内がその範囲として開発された。第4期は、1930年代から1950年代までの期間であり、当時建設されたモスクワの都心から50kmほどのグリーンベルトの中に建設されている。第5期は、1950年代から1990年代までであり、食糧不足を補うために都心から50kmのグリーンベルトを越えて、菜園付き別荘型ダーチャの建設が国家から推奨された。現在は、社会主義から市場主義へ移行した第6期に属する。

第3章から第7章までは、異なる時代と類型に属するダーチャの実態を7つの地域の現況フィールドワークによって解明するケーススタディである。従来の研究では不分明であったダーチャの空間的位相（街区、敷地内の樹木などの配置、住宅平面など）や人々のライフスタイルが、インタビュー、実測などによって可視化され、比較された。

以上の調査研究から、以下のような事象が明らかになった。第一に、現在モ

スクワで最も多くみられる菜園付き別荘型ダーチャ地区は、適切なインフラや居住サービスが整った居住空間へと改善されつつあり、また、グリーンベルト内側にある別荘型ダーチャ地区は、季節的別荘の性格を相変わらず有していることが解明された。このことから、菜園付き別荘型ダーチャは、永続的なものへと移行することによってモスクワの住宅供給に貢献し、また、別荘型ダーチャは開発圧力が強い都市近郊の自然環境の保全に寄与していることがわかる。

第二に、モスクワの郊外別荘の多くは、鉄道と密接な関係があることがわかった。この状況が継続し、さらに鉄道がより整備されるならば、自家用車の使用抑制につながるであろう。また、菜園付き別荘型ダーチャでの農業実践が組み込まれた生活様式は、新たな郊外化パターンのモデルとして利用されるであろう。この種の活動が都市的生活様式として統合されていくなれば、居住者の日々の食生活や居住区の自然環境を豊かにするだけでなく、高齢化や都市的孤独、衰退する地域開発などの都市問題の軽減にも貢献することであろう。

人口増加による郊外化は現在全世界の大都市で観察できる普遍的現象であって、交通量の増加からくる二酸化炭素排出の増大、緑地の開発による生物多様性の現象などこの問題が地球環境に及ぼす影響は極めて多大である。また、交通渋滞、ゴミ処理、住宅問題、上下水などのインフラ問題等の地域的環境に大きなインパクトを与える現象でもある。

しかし、同時にこの郊外化という現象は文化や歴史に根差したものであり、その解決にはその都市をとりまく時空間の丁寧な分析が必要となる。モスクワはユーラシアの北西部という生態に立地し、社会主義を経験するという歴史的経緯がこの都市の郊外化にどのように影響したかを解明した本研究は、地球規模での課題を地域的ケースの積み重ねから解決していくという、全世界が足並みをそろえて取り組まなければならないプロジェクトの第一歩として大きく評価できる。

一方、いくつかの課題も審査の過程で指摘された。第一は、歴史的背景の分析における文化的考究をさらに深めるならば、ロシアの文化、歴史の独自性の分析がより明らかにされる可能性があることの指摘であった。第二は、同様にダーチャ建築の物理的実体（構造、様式など）に関する歴史的変容の解明と分析の深化の必要性に関する指摘である。そして、最後に、モスクワという巨大都市の今後の都市経営への貢献に若干踏み込みすぎていることへ懸念も指摘された。

しかしながら、以上の指摘は決して本博士論文を損なうものではなく、むしろ、今後の本論文執筆者の今後の可能性にエールを送るものである。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。